

人生の贈りもの

資料収集次第に宝探し感覚に

京大人文科学研究所所長 山室信一(63)

5

——1978年、衆議院法制局を辞めて東大社会科学研究所の助手になりました。

論文の試験では、当時研究があまり進んでなかった井上毅という明治憲法の制定にかかわった官僚を取りあげました。彼がつくった政治文書を読むと、どうにか政治家を動かして自分の理念を表現したいという官僚の意気込みが行間から伝わってきました。法制局で実際の政治文書を扱った経験がなければ読み取れなかったでしょうね。

——どんな研究をしたのですか。

井上もそうですが、日本の近代政治や大学制度を形作った明

治期の官僚たちに興味があつて取りかかりました。あのころはよく夜行バスに乗っていました。

各地に残された資料を探すために、仕事が終わった後に夜行バスに乗り込み、図書館や史料をめぐりました。当時は科研費(科学研究費補助金)が限られていたので、できるだけ費用を節約しなければいけなかったのです。いま振り返ってみると、助手になったものの、研究者としての能力があるのだろうかと不安だったので、とにかく動いて資料探しに没頭していたかったのです。

——図書館には何があつたのですか。

埋もれた資料です。全国の図書館をつなぐ検索システムがある現在では想像できないと思

ますが、当時ほどの図書館にどんな資料があるのか、行ってみなければわかりませんでした。

図書館自身が所有する資料をきちんと把握していないケースもありました。図書カードの通し番号が抜けていたり、そもそもカードになっていなかったりするので、書庫に入って調べてきました。奥ではこりをかぶっている本が積み重ねられていて「あした捨てるどころだったんです」と担当者に言われたこともあります。あの時に見つけていなかったら消えていた本があつたかもしれません。

特に注目したのが、全国のいろんな私立大学ができたがるきっかけとなった雑誌です。明治期に欧米各国に留学した青年たちは、帰国して雑誌を作りまし

た。留学先のイギリス、フランス、アメリカなどの国家制度や文化を広めるため、競い合うように雑誌を発行していました。自分の知識や理想が日本の制度に採り入れられなければ存在理由さえ否定されますから必死だったんです。彼らは雑誌にとどまらず、恒常的な学習施設もつくりました。

——それが私立大学に。こんな大学創設の形は世界でも特異です。英学派は東京専門学校(早稲田大学)や英吉利法学校(中央大学)をつくり、フランス学派は和仏法律学校(政法大学)、アメリカ学派は専修学校(専修大学)といった具合です。これは見つけた雑誌を分析しているうちにだんだんわかってきたことでした。資料収集が次第に宝探しのように思えてきて、自分がハンターになったように心はずむ作業になっていきました。

(聞き手・河野通高)



東大助手時代。資料調査で訪れた山口県萩市の長州藩校「明倫館」跡地で1983年、本人提供